

鳴門市における増田友也による学校建築に関する予備的考察

—北灘東幼稚園，北灘西幼稚園，瀬戸幼稚園，島田幼稚園の園舎観察から—

Preliminary Study on School Architecture in Naruto City by MASUDA Tomoya.

— Based on observations of Kitanada-higashi Kindergarten, Kitanada-nishi Kindergarten,
Seto Kindergarten, and Shimada Kindergarten —

谷 村 千 絵

TANIMURA Chie

鳴門教育大学学校教育研究紀要

第 36 号

Bulletin of Center for Collaboration in Community

Naruto University of Education

No.36, Feb, 2022

鳴門市における増田友也による学校建築に関する予備的考察 —北灘東幼稚園、北灘西幼稚園、瀬戸幼稚園、島田幼稚園の園舎観察から—

Preliminary Study on School Architecture in Naruto City by MASUDA Tomoya.

— Based on observations of Kitanada-higashi Kindergarten, Kitanada-nishi Kindergarten, Seto Kindergarten, and Shimada Kindergarten —

谷村 千絵*

*〒772-8502 鳴門市鳴門町高島字中島 748 番地 鳴門教育大学 現代教育課題総合コース
TANIMURA Chie*

*Basic Human Science for Integrated Studies
Naruto University of Education

748 Nakajima, Takashima, Naruto-cho, Naruto-shi, 772-8502, Japan

抄録：本論文では、増田友也によって鳴門市に建てられた12棟の学校建築に注目し、学校建築としての増田建築の特徴を明らかにするための予備的考察を行なった。増田の建築家としての活動の中で、鳴門市の学校建築は、晩年の10年に立て続けに建設されている。これは、増田の建築論の思索過程において後期に存在論を主に論じた時期と重なっている。また、北灘東幼稚園、北灘西幼稚園、瀬戸幼稚園、島田幼稚園の4園舎の観察から、これらの学校建築の特徴と考えられる点を、(1)土地の形に馴染む造形、(2)万博のパビリオン風、(3)生活者から考えた問題点の3点にまとめた。増田友也の学校建築の特徴を明らかにするためには、増田の建築論のとくに後期の存在論との関連を明らかにすること、また増田が教育について何らかの考えを有していたのかどうかについても、明らかにすることが課題として示された。

キーワード：増田友也、鳴門市、学校建築

Abstract : This paper clarifies the characteristics of Masuda Architecture as school architecture, focusing on 12 school buildings built by MASUDA Tomoya in Naruto City. The construction of schools in Naruto City took place continuously during the last 10 years of Masuda's career as an architect. In this paper we discuss the existence theory in the later stage of the speculative process of the architectural theory of Masuda, which overlaps with the period. In addition, from the observation of four kindergartens (Kitanada Higashi Kindergarten, Kitanada Nishi Kindergarten, Seto Kindergarten, and Shimada Kindergarten), we summarize the characteristics of the school buildings into three points: (1) modeling that fits into the shape of the land, (2) the pavilion style of the expo, and (3) problems from the viewpoints of the residents. To clarify the characteristics of Masuda's school architecture, the relation between Masuda's theory of architecture and ontology, especially in the late period is presented together with Masuda's opinion on education, if any.

Keywords : MASUDA Tomoya, Naruto City, School Architecture

I. はじめに

建築家、増田友也(1914-1981)が手がけた建築が鳴門市には数多くある。有名なのは現市庁舎などであるが、1961年から1982年(1982年は鳴門市文化会館竣工の年で、病気で急逝した増田の遺作となった)の約20年の間に、鳴門市ではいくつもの公共施設、とりわけ幼稚園、小学校、中学校の学校建築が増田によって精力的に建設された。

本論文では、増田による鳴門市の学校建築のうち、4

つの幼稚園舎の観察データを題材として、学校建築としての増田建築の特徴を明らかにするための予備的考察を行なう。

以下では、IIにおいて、鳴門市における増田建築の全容ならびに増田の建築論の特徴について概要を示す。IIIで、鳴門市の増田建築について全体像を示した上で、増田の学校建築の特徴について、4つの幼稚園舎に共通する特徴について考察を行う。IVでは、瀬戸幼稚園と島田幼稚園を題材として、生活者としての視点から浮かび挙がる疑問について提示する。最後に、これらの予備的考

察を踏まえ、増田の学校建築に関する研究の今後の課題を提示する。

II. 鳴門市における増田建築について

1. 増田友也と谷光次

増田友也は、大正13年(1914年)、淡路島の三原郡八木村(現兵庫県南あわじ市)の生まれである。昭和10年に京都帝国大学工学部建築学科に入学し、教授の森田慶一(1896-1983)に師事した。

市川(2017)によれば、増田が大学を卒業した時期は、日中戦争のさなかであり、国家総動員法などの戦時体制が強まる時勢であった。増田は、満州炭鉱工業会社へ就職している。

建築家のつながりのなかで、コンクリート船の建造計画にも携わったと言うことだが、やがて5年間のシベリア抑留生活から生還して、36歳のときに恩師森田に呼び寄せられて、京都大学の講師に着任した。

それでは、鳴門市に、なぜ、増田建築が多いのか。当時の鳴門市長であった谷光次(1907-2002)との関係が深かったことは、よく知られている。

徳島新聞の連載記事「保存か解体か鳴門に残る増田建築」の「2人の師 メモに残る感謝の念」(2018年7月7日)では、増田が大学職を定年退官した2年後に残した手書きのメモが紹介され、そこには恩師として谷の名前が挙がっている。

「人にとってもっとも偉大な師匠というのは、その人に何ごとかを教え知らしめたというような人物の存在ではない。そのような師匠が居ると言うただそれだけのことで偉大なのだ。森田先生、谷市長のような存在なのだ」

森田とは、前述の恩師である。そして、谷は増田の7歳年上で増田と同じ京都帝国大学の法学部を卒業している。その後、弁護士となり、1959年から1987年までの28年間、7期に渡り鳴門市長を務めた人物である。

記事によれば、谷は建築のことに明るく、市長として鳴門市市民会館(1961年)の建築を増田に依頼して以来、二人は意気投合したという。「森田が学問上の師であるなら、谷は、増田が建築家として活躍する場を継続的に与えた絶対的支援者だった」と記事は報じている。谷の鳴門市長在任期間(1959-1987)と増田建築が鳴門に建てられた1962-1982年は、ほとんど重なっている。谷とは7歳しか年が離れていないのに、生涯を通じた恩師として挙げられているのは、谷が増田の「絶対的支援者」であったことの証左でもあるだろう。

2. 時代背景—高度経済成長

また、時代背景も重要である。増田が鳴門で建築を手がけた1961年から1982年までの約20年間は、日本では高度経済成長期に当たる。そして、1970年が大阪万博の年である。

鳴門でも、この時期は高度経済成長による人口増加と、競艇事業の成功で市には豊かな財源があり、「次の世代を担う子供たちの教育に力を注ぐべく、最先端の教育施設が建てられた」ことで、増田による学校建築が数多く残されたとされている(福田・椿地2017, p.193)。

増田友也は日本のモダニズム建築を代表とする建築家として第一線で活躍していた。年齢的にもこの時期は、増田が50代から晩年の60代を迎えるころであり(享年67歳)、弟子ももちながら、精力的に自身の建築を極めた時期であったといえるだろう。

当時、主に鳴門の仕事を請け負うための「生活環境研究所」を設立し、契約や建築確認申請などを組織的に行っていたという。約20年の間に19棟以上の増田建築が建てられている。増田が、高度経済成長の波に乗った鳴門市で積極的に建築を展開したことが伺える。そして、19棟のうち、学校建築が12棟あることも特筆すべきであろう。

12棟の学校建築については次節に詳述するが、学校建築以外に増田が手がけた公共施設は、以下のようになっている。福田・椿地(2017)に挙げられているリストをもとに、竣工年順に挙げていく。

- 鳴門市市民会館(1961)
- 鳴門市庁舎(1963)
- 共済会館(1973)
- 木津保育所(1975)
- 勤労青少年ホーム(1975)
- 老人福祉センター(1977)
- 文化会館(1982)

この中でも、鳴門では初めての増田建築として竣工された鳴門市市民会館(1961年竣工)、鳴門市庁舎(1963年竣工)、そして80年代に最後の遺作となった鳴門市文化会館(1982)の3つは、国内外から評価されている。特に優れたモダニズム建築として、前者2つが国際組織(DOCOMO)によってDOCOMOMO JAPANに選定され、遺作の文化会館は旧建設省によって優れた公共建築100選に認定されている。

現在、鳴門市では建築価値の顕彰および利活用のために、増田が所属していた京都大学大学院工学研究科と連携協定を結び、学術研究、資料整理を進めている。また、市民会館、市役所、文化会館の建て替えが決まったことから、これらの建築物のアーカイブ事業も始まっている^{注1)}。

3. 増田友也の建築論

今日ではモダニズム建築の代表者として知られる増田であるが、その建築思想をみると、西洋主義一点張りではない。

増田は「故郷の淡路島を含む瀬戸内海という母性的で情緒的な原風景を有していた」とも考えられると市川(2017)は述べている(p.110)。土着主義的のといっよいのかどうか分からないが、日本という土地で建物を建てるとはどういうことなのかを原理的に問い、その問いと考察から得られた解に即して、合理的に建築を行なおうとする指向を伺い知ることが出来る。

増田の師にあたる森田慶一は、西欧哲学の探究を建築論と結びつけた人物であり、「日本に建築論という学問を根付かせた」(前掲の徳島新聞記事より)とされ、森田とその研究を引き継いだ弟子である増田およびその門下生による研究成果は、「建築論の京都学派」という学派を形成している^{注2)}。

増田は、学位論文「建築的空間の原始的構造」を執筆している。空間現象に着目し、現象学的存在論に依拠する「建築論」を論じた。

筆者は、建築について素人であるけれども、書き残された論文や随筆に目を通すと、建築するとはどういうことなのか、増田が探究を深めていったことが伝わってくる。増田の西洋哲学に学ぶ、合理的な思考と、日本の家屋や広島県の厳島神社など、日本古来の風俗、あるいは伝統的な建造物の解釈を、日本の風土に即して行う思考が合わさっているように感じられる。

ところで、恩師森田の建築論との違いについて、市川(2017)は次のように述べている。

「建設とは何か」に向かって、清涼な山々を見渡すごとき森田自身の問いが「建築とは如何にあるべきなのか」であったとすれば、深遠な森の奥地へ地面を這うごとき増田にとっては「建築とは如何にあることが可能なのか」を問い続けたと思われる。(p.121)

高いところから建築の「べき論」を論じる森田に対して、増田は地を這うように、森に分け入るようにして建築が現実「どうありうるか」を問うたという。それは増田が設立した「生活環境研究所」という名前にも表れているように、人間の生活環境の実際に分け入るような姿勢をもっていただものと思われる。

また、増田の建築論の研究過程について、市川(2017)は、空間論を主とする前期思索の時期(1950年代から1960年代前半ごろまで)と、風景論を主とする中期思索時期(1964年ごろから1971年頃まで)、そして存在論を主とする後期思索の時期(1970年代から晩年まで)の3つの区分で捉えている。

この区分に照らして考えると、増田が鳴門で建築を精力的に手がけた1961年から1982年は、増田の建築に関わる思索過程のうち、前期の終盤から中期の全てと後期も1981年に病気で急逝するまでの全ての期間である。増田の建築家としての歩みにおいて、鳴門はほとんど全ての時代に関わっていたことになるが、後に述べるように、学校建築は全て1970年以降に建てられている。鳴門市における増田の学校建築には、増田の思索過程における後期の存在論の影響が、もっとも強いということが考えられる。

Ⅲ. 鳴門市の増田の学校建築

1. 12棟の学校建築

鳴門市の増田の学校建築は、先にも述べたように19棟のうち、12棟と増田建築のなかでも最も多い。福田・椿地(2017)に挙げられているリストをもとに、竣工年順に挙げていく。

北灘東小学校(1972)
鳴門中学校(1972)
北灘東幼稚園(1973)
北灘西幼稚園(1974)
北灘西小学校(1977)
瀬戸幼稚園(1975)
瀬戸小学校体育館(1977)
桑島幼稚園(1977)
鳴門第二中学校(1978)
鳴門東小学校(1979)
鳴門東幼稚園(1980)
島田小学校・幼稚園(1981)

竣工年を見ると、12棟のうち、10棟が1970年代に竣工されており、建設期間も考えると約10年の間に12棟の学校建築が次々と建てられたことが分かる^{注3)}。

この時期は、前述の増田の思索過程のうち、存在論を主に論じた後期1970年代から晩年の1981年までと、ほぼ重なっている。当時の増田は50代の終わりから60代にかかる年代で、思索過程としては先にも述べたように後期の存在論が展開された時期である。

校種で見ると、幼稚園舎が6棟と最も多い。ついで、小学校が5棟(島田小学校・幼稚園は幼稚園と小学校の両方に数えている。また、瀬戸小学校体育館も小学校に数える)、中学校が2棟となっている。瀬戸小学校は体育館のみであることを考えると、幼稚園舎が突出して多い印象がある。なお、桑島幼稚園や鳴門第二中学校など、現在も使用されているものもあるが、多くは休校、廃校になっている。

筆者は、北灘東幼稚園（1973）、北灘西幼稚園（1974）、瀬戸幼稚園（1975）、島田幼稚園（1981）の4つについて、外観および内観を観察した。以下では、この4つの園舎の特徴について、述べていきたい。

2. 土地の形に馴染む設計

(1) 北灘東幼稚園

北灘東幼稚園は外観としてはあまり主張のないコンクリートの小さな建造物、玄関も小さく作られ、静かな要塞といった雰囲気である。土地の傾斜に馴染むように建造されているように感じられた（図1）。



図1 北灘東小学校園舎

左手、自動車の右横が幼稚園玄関。右の建物が園舎、手前に園庭。左奥の白い壁面は小学校

図1の写真では、桜の大樹に遮られて見にくいのであるが、奥の高い建物が小学校、手前の少し低い建物が幼稚園である。写真の左手は山間部、そこから、なだらかな丘陵地となって、右手にはすぐそこに北灘の海、瀬戸内海が見える。この土地は沿岸の、なだらかな斜面となっている。

北灘東幼稚園は北灘東小学校に隣接しているのだが、なだらかな傾斜のある斜面に沿うように、右手が高く、左手が低くなっている。園舎の手前は川が流れており、



図2 北灘東幼稚園 玄関
左が小学校、右手は小学校と共有の正門

この傾斜（手すりの傾斜）が元々の土地の傾斜である。幼稚園は盛り土をして土地を水平にし、その上に建てられている様にも見受けられる。

面白いのは、幼稚園の玄関が、10段ほどの階段を登って入るようになってきていることである（図2）。

階段を上がって、玄関を入れて廊下をぬけていくと遊戯室やホールがあるが、次第に、下がっていく。一番奥にあるホールは園舎の中で最も下がっていて、ホール入り口から四段下がったところ、もっとも奥まったところに、ホールがあるといった形である（図3）。



図3 北灘東幼稚園
ホール（手前）入り口の階段

この土地が、海に向かってなだらかに傾斜していることを、幼稚園舎そのものが表現しているようでもある。盛り土をして水平にした土地に、わざわざ山側を底上げして玄関を造り、そこから海に向かって下がっていくように、園舎が造形されているのではないだろうか。

子ども心に、なにか探検をしていくようなワクワク感、あるいは奥まったところに落ちていく安心感、そういったものが感じられるのではないかと思う建物であった。

(2) 島田幼稚園

島田幼稚園は島田小学校と同じ建物の一部である。学校全体がコンクリートの要塞のような作りになっており、玄関が目立たないので、ぱっと見て、どこが幼稚園の入り口か、わかりにくい（図4）。

そしてこちらも、土地の形を写し取ったような建造物になっている。背後にある山と、平地にあるグラウンドの境目に、小学校と幼稚園が一緒になった建物が建っているが、山と平地を切り分け、屹立するように学校が建っているのではなく、山から平地に至るなだらかな斜面を、そのまま建造物として再構成したような造りになっている。

なお、島田小学校・幼稚園には、増田の学校建築として着目した先行研究がある。建築の専門家である西村・



図4 島田幼稚園（小学校も含む全体）
グラウンド左手から上がる階段の上の四角い
開口部が幼稚園の玄関

水島・坂戸（2016）は、この建物の特徴を以下のように述べている。

「西側の敷地が山の斜面となっておりその斜面に沿うように校舎も段々と西に行くにつれて上がっていく。そのため校舎各階或いは教室の輪郭が少しずつずれて積層してゆく。校舎とグラウンドを繋ぐ階段は水平に長く広がり、建物と同様に水平線で構成されているため庭と建築を調和させている。」

このように、土地の形に沿うような造形で建築されていることに、増田建築の1つの特徴があるといえそうだ。

(3) 北灘西幼稚園と瀬戸幼稚園

北灘西幼稚園は北灘西小学校と隣接している。この土地も、山を背景として瀬戸内海に面する沿岸部であるが、北灘東よりも山は切り立って海に迫っている。小学校は山を背にして建ち、海の方角に向かってグラウンドが広がっている。ここも、山と平地の境目に沿いながら、2つを繋ぐようにして、学校が建っている。

そして、大きな小学校校舎の右手奥に、こぢんまりと隠れるように建てられているのが幼稚園舎だ。小学校校舎と幼稚園舎は別棟ではあるが、幼稚園はとりわけ、こ



図5 北灘西幼稚園玄関（右奥）
手前は小学校玄関で山と校舎がそびえる

この風景のなかに溶け込むような配置で建てられている。園庭は小学校のグラウンドとは反対方向にあり園舎の山側にあつて、周囲の視界から遮られ、ひっそりと守られている雰囲気である（図5）。

瀬戸幼稚園は、漁師町の上の山の中腹に建てられている。外観はかなり目立つ形で、ガラス張りの壁面と園舎の屋根が極めて特徴的である。この屋根は、四方が切り立ち、中心がくぼんでいる。図6の写真では分かりにくいですが、方形の建物の四角い屋根で、後方は右奥、左奥とも手前と同じ角度で持ち上がっている。そしてよく見ると、建物の背景となる山の斜面と、この屋根の傾斜とが平行となっており、寄り添うような形となっている（図6）。



図6 瀬戸幼稚園
後ろの山の斜面と同じ角度の屋根
右手の長方形部分が玄関からホールに続く廊下

このように、土地の形に寄り添い、馴染むような造形がなされていることが、4つの園舎に共通しているように思われた。

空間、風景、存在というテーマを考究していた増田の建築論が、こうした造形を支えているのではないと思われる。

3. 1970年代という時代の風

ところで、4つの園舎は、同じ増田建築といっても風貌が異なり、それぞれに個性的でもある。とりわけ北灘西幼稚園と瀬戸幼稚園は、目立つ造りとなっている。北灘東幼稚園や島田幼稚園のような、静かな要塞風の小さなコンクリート建造物といった外観ではなく、この2つの園舎を見たときには、1970年の大阪万博のパビリオンを思い起こした。

北灘西幼稚園は、園舎自体は、先ほども述べたように、小学校と山の間に隠れるようにしてあまり目立たない場所に建てられているのだが、建物自体は、コンクリート要塞風の小学校の雰囲気とは、まったく異なっている。屋根と壁の接合部が壁ではなく、鉄パイプが幾何学的に張り巡らされているのだ（図7および8）。斜めにパイプが走る幾何学的部分は、1メートルほどの高さがあり、外観からもかなり目立つ。また、遊戯室や廊下の天井に



図7 北灘西幼稚園 壁と屋根の接合部分



図8 北灘西幼稚園 天井

もつながる形で、幾何学的部分が水平に設置されている。これは、1970年の大阪万国博覧会の時に、「太陽の塔」の周りにあつらえられたパピリオンの構造と極めてよく似ている。

瀬戸幼稚園は、もっと目立つ。先ほども述べたように、山の中腹に、かなり目立つ形の屋根をもつホール部分が構えている(図6)。

玄関は控えめで、ホールが先に目につくといっただろう。玄関は、ホールの横に張り出した廊下の先に、小さく作られており、玄関から細くて薄暗い廊下を歩いていくと、ガラス張りのホールに出るといった構造になっている。

このホールは、壁面に細かいサッシが入っているものの、全てガラスである。大変に明るく、開放的である。この全面ガラス張りの壁と、そして四方に切り立った屋根をもつホールは、やはり著者にはどこか大阪万博のパピリオンを思い起こさせるものであった。

大胆で先進的で、未来に対する明るい展望、といった力強いイメージがある。細く薄暗い玄関から明るいガラス張りホールを通り抜けた先に、園児たちが一番長い場所である遊戯室が作られていて、つまり、園児たちは毎日ここを通る経験をするように構成されているといえる。

前述した西村・水島・坂戸(2016)は、増田の学校建築について、「増田は制度としての教育には興味を持た

ず、それ以前に人間としての在り様を重視していた」としている。そして、学校建築の典型である北側片廊下や中廊下とそれに整列するように並ぶ教室配置を嫌って、「鶏小屋のようなところは学ぶところではない」と言っていたこと、また増田が、学ぶという言葉が「まねぶ」からきていることを論考のなかで述べていることから、子どもが自然と年長者をならって学んでいく姿を念頭において、オープンスペースやクラスター制を導入したのではないかと考察している。

そして西村らが指摘するように、日本の学校建築にオープンスペースが広く導入され始めたのは1970年代後半以降であるから、増田の学校建築は、その先駆けとなる存在であったといえそうだ。古い時代を乗り越えて、新しい時代へと変わる、そうした時代の潮流にも、いち早く増田は乗っていたのではないだろうか。

このように考えると、いわゆる伝統的権威を象徴するような学校建築の風貌(正面が明確で、立派で大きな玄関があり、中央に時計があるというような全国一律で典型的な形)が、増田建築には見られない。

建造物として美しく、風景に溶け込むようなライン、そして、1970年代の時代の風を感じるデザイン。地方都市である鳴門の学校建築として、コンクリート製のモダニズム思想をもった、そして建築の京都学派と称される、日本の風土や建築論を踏まえた建造物が建てられた。ここには、いろいろな文脈が交差しているように思われた。

IV. 生活者の視点からの疑問

4つの園舎はいずれも休園、閉園が決まっているもので、今は子どもたちの姿はないが、ここに、たくさんの園児と数人の教員がいて、一緒に生活をしている様子を思い浮かべると、少し不思議でワクワクするような建物である反面、教育関係者としていくつか違和を感じたこともあった。

幼い子どもの生活の場所としての安全や、教員の仕事のしやすさなどが、あまり配慮されていないように、思えたからである。瀬戸幼稚園と島田幼稚園を観察して気がついたことを述べたい。

1. 瀬戸幼稚園

瀬戸幼稚園の全壁ガラス張りのホール(図9)は、明るくて開放的だが、子どもがぶつかったり、おもちゃやボールを投げたりしたら、すぐにでも割れてしまいそうだ。

サッシや梯子のような建造物もあり、ガラス1枚の大きさは、それほど大きいものではない。さすがに、割れにくい強化ガラスが入っているのかもしれない。ただし、



図9 瀬戸幼稚園 ホールのガラス壁面

地震などで万が一割れたときには、かなり高い位置から園児や教員の上にガラスが降ってくる可能性があることを思うと、少しぞっとする。

そして、採光がよすぎるようにも思われる。ビニールハウスとおなじ温室効果がありそうで、過度の日焼けや熱中症の危険を感じざるをえなかった。建設当時の1970年代や1980年代は、熱中症のことは今日のように警戒していなかったように記憶しているが、瀬戸幼稚園には2013年までは子どもたちが通っていたことを考えると、どのような対策をとっていたのかと気になった。カーテンレールの設置も見られなかった。

エアコン設置の有無については未確認であるが、学校にエアコン設置が進んだのはこの数年のことで、1970年代の建設当時に園舎にエアコンが設置されていた可能性は低いだろう。

また、瀬戸幼稚園では、廊下の床に引き上げ式の鉄製の蓋が施してあって、床下が見えるという造りがあった(図10)。



図10 瀬戸幼稚園 床にある引き上げ式の蓋

幼児であれば裸足で歩くこともあるので、金属製の蓋の縁などで園児が足を切ったり、指を詰めたりしないだろうか。また好奇心が強い園児が、隙間からオモチャやゴミを落とそうとするかもしれないし、土や水を入れて

みたり、開けようとしてみたりすることもあったかもしれない。

床下を覗いたり、床下の空気の温度や匂いを感じたり、虫を見つけてみたり、と園児にとっては何かと興味深い場所かも知れない。しかし、保育者としては、怪我や故障などへの配慮に、いろいろと手間がかかったのではないかと感じた。

2. 島田幼稚園

島田小学校の各教室は、全面南向きで、広いバルコニーがついている。各教室はなだらかな斜面を形成するように、少しずつずらすように設置されているため、各バルコニーも、段々畑のように広がっている。

そして、各バルコニーは、階段などでつながっており、行き来ができるようになっている。また、幼稚園園庭やグラウンドにも、そこから降りて行ける構造になっている(図11)。



図11 島田幼稚園

教室のバルコニー(右手)のベンチと園庭への通路
この通路の先が階段で、幼稚園園庭に通じている

幼稚園は一階部分にあるので、幼稚園の園庭から外階段を登り、通路を進むと、小学校の教室のバルコニーに行くことができる。バルコニーは、異年齢児が自在に往来できる。まさに「まねぶ」から学ぶことができる場所である。

バルコニーの一部は縁がベンチ仕様になっているところもある。ここに、いろいろな子どもたちが座ったり、群れたりして、集まっていたのかもしれない。しかしよく見ると、ベンチの背もたれは40センチほどとそれほど高くないのだが、一段下がった通路までの落差をみると1メートルを超えている。

当時の小学生が、喜々として遊んだであろうことが想像できるが、低学年の児童や園児がここから落ちて怪我をするということがなかったのか、あるいはそういうことが起らぬよう、教員が始終見守らなければならなかつ

たのではないかと気になった。鳥田幼稚園は2003年から休園しているが、園児や教員はどのようにここを使っていたのだろうか。

3. 安全配慮と教育思想

以上のように、今日の視点で、筆者が観察した際の個人的所感ではあるが、増田友也の学校建築には、園児の安全と、教員の仕事のしやすさへの配慮が十分でないように思える点がある。もっとも、実際に園舎で過ごしていた園児や仕事をしてきた教員が、どのように感じていたかは、確かめられていない。

子どもの環境の安全性配慮については、1970年代と2021年の今日では、社会的通念が大きく異なっていることは考慮しなければならないだろう。子どもにとって危険なものは回避すべきだというような社会的風潮は、1990年代頃から強まったように記憶している。1970年代、80年代には、小学校や公園に「回旋塔」など今日では危険性のために撤去されてしまったが、子どもに人気のあった遊具が置かれていた時代である。

子どもの身の周りの危険を全て大人が管理し、子どもから遠ざけることが、かえって子どもの成長を阻害することも、当然憂慮すべきことだ。増田建築の幼稚園舎では、園児と教員双方が園舎を使って生活する中で、いろいろな危険を察知し、身のこなし方を学んでいったことも想像できる。増田が、そうしたことをあえて考えた上で、これらの幼稚園舎を設計した可能性もある^{注4)}。

危険をゼロにするのか、あるいは放置するのかの二者択一ではなく、そこで生活する人のありようを考えながら、教育施設としての妥当な範囲というものを考慮しなければならないだろう。

4. 住まうことへの視座

これらの点については、増田の建築論と思索過程を紐解き、学校建築において、増田が何を体現しようとしたのかを解明する余地が、まだまだあるように思われる。それには、増田の思索の過程の3つの段階、空間論、風景論、そして存在論において、幼稚園舎の設計が、どういう思想や思惟に基づいてなされたのかを、より明らかにする必要があるだろう。

増田の後期の思索の特徴である存在論は、ハイデッガーの存在論の影響を強く受けているという。ハイデッガーは、「住まうこと」を説いた哲学者でもあった。たしかに、増田の学校建築は、鳴門のそれぞれの土地の形をあえて象るように、まるで建物が風景に住み込んでいくようにも感じ取れる。

しかしながら、教育施設としての学校建築は、様々な特性を有した人が毎日のように集い、日々の生活を営む場所であり、現場の都合で、生活者によっていろいろな

使い方をされていくものでもある。「そこに住む者=生活者」としての建築という視点、あるいは「人が住まう場所」としての建築という視点が、増田の学校建築には明示的には取り入れられていなかったのではないだろうか。

高所大所から見下ろすのではなく、「地を這い」、「森に分け入るような」視点で、人間と建築について考えていたという増田である。60代での急逝は、早すぎる死として惜まれたというが、やり残した仕事があったのではないだろうか。

ハイデッガーの存在論から、人が住まうことを哲学的に探究した人物に、ボルノーがいる。ハイデッガーやボルノーの「住まうこと」の哲学を補助線として引いて考察することで、増田の学校建築をより深く理解すること、そしてそこから新たな可能性を引き出すことができるのではないだろうか。

本論文において、少なくとも幼稚園舎4つを観察した限りではあるが、鳴門市に12棟もある学校建築としての増田建築は、こうした問いを生むという意味で際だった存在である。哲学的思索を建築という具体物に落とし込むという実験的性格を有するものとして、異彩を放っているし、学校建築のあり方を考えていく上でも私たちに重要な問いを残している。

増田建築に対して教育の現場から問い返すことは、単に使い勝手の問題をあげつらうことではない。思想や理論を実践にどのように結びつけることができるのかという、教育学にとってより原理的な問いもまた、ここに開かれているように思われる。

V. おわりに

本論文では、鳴門市にある増田友也による建築のなかでも、学校建築とりわけ幼稚園舎に着目し、その特徴を考察した。

増田に学校建築を依頼した当時の鳴門市長の谷は、「建築が人に与える力を信じていた」（前出の徳島新聞記事）ことから、増田と意気投合したという。たしかに、4つの園舎には、建築を通してこちらに語りかけてくるものがある。

筆者は建築の専門家ではないけれども、実際に園を訪れて、外観や内観を観察した結果から、いずれの園舎も土地の形に馴染む設計が成されているように見えること、うち2つの園舎には、1970年の大阪万博のパビリオン風の時代の雰囲気を感じられたことを述べた。しかしまた、幼児の生活の場として考えた際の、危険の多さ、教員の仕事のやりにくさを感じられる箇所があったことも示した。

ハイデッガーとボルノーの「住まうこと」の哲学を補

助線として、増田の空間論、風景論から存在論にいたる思索の過程と学校建築との関係を明らかにすることを今後の課題として挙げたい。また、増田による学校建築の他の園舎や校舎の観察および卒園児、卒業生、現在の園児や生徒、そして勤務経験のある教員へのインタビューなどによっても、本論文において示した予備的考察の妥当性を検討していく必要があるだろう。

本研究は、JSPS 科研費 20K02631 の支援を受けています。

注記

注1) 京都大学総合博物館では、2021年度企画展「増田友也の建築世界——アーカイブズにみる思索の軌跡」会期：2021年10月27日(水)～12月12日(日)、鳴門市共催が予定されている。

注2) 京都学派とは、西田幾多郎や田邊元ならびに彼らに師事した日本の哲学者（京都大学を中心に活躍した哲学者）を総じて呼称されるものである。近代西欧の合理主義の哲学に学びながらも、東洋思想や日本文化を捨象することのない、独自の哲学思想を生み出した。

注3) なお、本データを引用した福田・椿地（2017）には挙げられていないが、門間・田路（2017）によれば1963年には鳴門市立工業高等学校も増田研究室設計の作品として建てられた。鳴門市立工業高等学校は、鳴門第一高校との合併で2012年より徳島県立鳴門渦潮高等学校に新設統合され、現在は校舎も建て替えられている。

注4) なお、増田建築とはいっても、増田個人が全てを取り仕切ったのではないかもしれない。西村・水島・坂戸（2016）によれば、島田小学校と幼稚園の設計チームは、増田友也の息子で、当時京都大学の研究生であった増田令夫であるという。京都大学の増田研究室のメンバーや前述した生活環境研究所のスタッフなど、増田グループにとって学校建築がどのように捉えられていたかが、増田の学校建築の細部に、具体的な影響を与えている可能性があるだろう。

参考文献

市川秀和（2014）『「建築論」の京都学派 森田慶一と増田友也を中心として』近代文藝社
門間光・田路貴浩（2017）「増田友也の建築作品における空間的特質に関する研究」『平成29年度日本建築学会近畿支部研究発表会』pp.529 - 532.
西村和起・水島あかね・坂戸省三（2016）「学校建築における増田友也の思惟に関する研究—鳴門市立島田小

学校を事例として」『日本建築学会大会学術講演梗概集』pp.219 - 220.

福田頼人・椿地浩之「鳴門市に残る増田友也の建築」『阿波学会紀要』第61巻pp.193 - 194.

「保存か解体か鳴門市に残る増田建築 2人の師 メモに残る感謝の念」『徳島新聞』2018年7月7日 (<https://www.topics.or.jp/articles/-/65357> 2021年9月28日閲覧)